

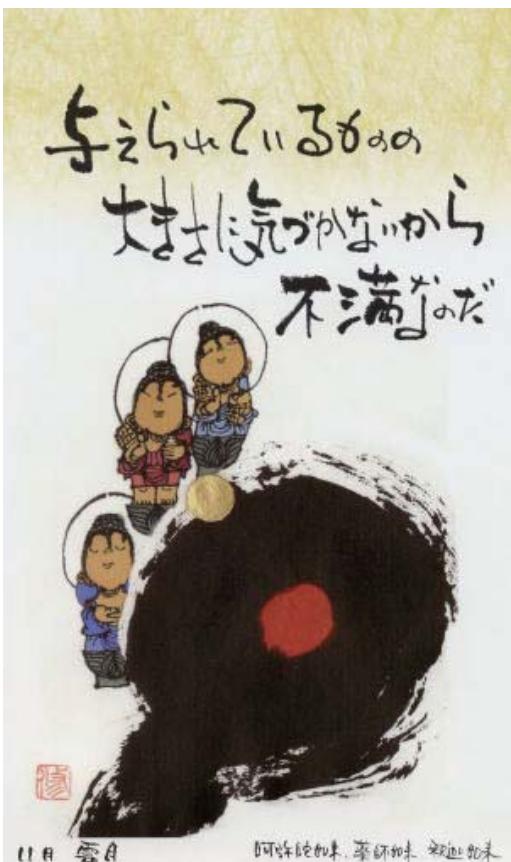
与えられているものの大きさに

気づかないから不満なのだ

凶悪な少年犯罪、自殺者が約三万人の異常な社会、そして何事も他人事として処理されていく日本の日本、そんな現象があちこちで見受けられます。悲しみを我が事として受け止められなくなってしまった、感受性や想像力が乏しくなってしまった、私たち・・・

いつのころからこんな人間たちが多くなってきたのでしょうか。高学歴社会になり誰もが「賢く」「偉く」なったはずなのに。

精神科医・神谷美恵子さんの講演での言葉です。「知識などといったものを全部棄てて、無にかえて肌で人生を感じとつてみる、そうすれば棄てたところから豊かな感受性がよみがえてくる」神谷美恵子さんは大変な知識人でした。海外留学を経験し、それからも医学の道を志し精神科医として、又大学教授などの道を歩んでいます。その知識を棄てて裸の自分をみさせてくれたもの、それは瀬戸内海にある長島愛生園でのハンセン病の患者との出会いでした。歴史的にも、現在においてさえもなお患者の方々は差別と偏見に苛まされ続けています。この実態に触れたとき、神谷さんは自分の知識や、恵まれた己の境遇に「負い目」を感じて行くようになります。神谷さんは「べつに理屈ではない。ただ、あまりにむざんな姿に接する時、ここのどこのかで切なさと申し訳なさでいっぱいになる」



平成25年11月
今月のことば

金儲け、権力争い、そして勝ち組負け組があからさま

になっていく社会が豊かとは言えません。百万人の勝者に目を向けるのではなくたった一人の敗者に目を注ぐのが仏教の心なのです。しかしこの事が出来ないのも事実であります。その自己への冷徹なまでの眼差しを仏法によつて知らされ親鸞聖人は自己を嘆き詩います。その嘆きを感受性とは申しませんでしょうか。「悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して」(悲しい事ながらこの親鸞は愛欲の果てしない海に没し、名譽や財産に迷いまどります)と。